

米国姉妹都市派遣高校生 渡航レポート

町内在住の高校生3名が町国際交流協会から7月22日(月)から8月5日(月)までの15日間、米国オハイオ州デイトン市に派遣されました。ホームステイや市民との交流、そして姉妹都市提携50周年の記念式典に出席するなど貴重な体験をされた高校生たちのレポートをご紹介します。

問町国際交流協会事務局 ☎ (61) 0296 柳田

「だれもがフレンドリー」

岩田 博

ホストファミリーのコーベットさん一家は、親日家で家族思いのドリユーさん、料理上手のキムさん、去年日本に来たブライデン、大学生の姉レイリー、中3の妹アベリー、愛犬のキャリーです。このプログラムの応募のために作った伊藤博文と吉田茂クイズや日本語ゲームを積極的に楽しみました。「うれしい」や「さよなら」を覚えてくれました。皆いつも「Are you hungry?」と気にかけてくれ、「おなかすいた?」という日本語を教えるとブライデンが頑張っ

て使ってくれたのが嬉しかったです。一番印象的だったことは、「だれもがフレンドリー」だったことです。デイトンに向かう機内で、前列のアメリカ人が楽しそうに話し、その輪が広がったこと、レストランや買い物先では必ず店員さんが「How are you?」「What can I do for you?」と声をかけてくれました。大磯町とデイトン市交流50周年記念式典では折り紙で飛行機や兜を子どもたちに折ると興味

いっばいに接してくれました。現在、日米・日韓・米朝で政治的に様々な問題があります。こういう時代だからこそ、デイトンの人々のフレンドリーさにならって、民間レベルで積極的に言語・文化・価値観の違う人々と心を通わせていく必要があると感じました。

今回、貴重な機会を与えてくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。またデイトンに哀悼の意を表します。



デイトンでの発見

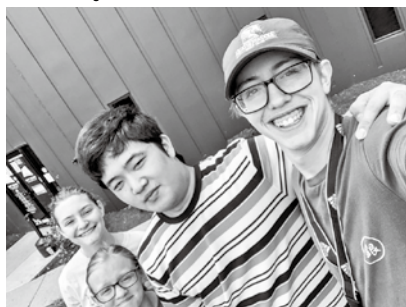
鈴木 智也

初めはホストファミリーとコミュニケーションが取れるか不安でしたが、皆ゆつくりと分かりやすく話しかけてくれたおかげで英語が通じる楽しさを味わえました。会話は状況判断と理解し合いたいという強い気持ちがあれば言葉の壁を越えられることを実感しました。4歳のジョナサンだけは早口で苦労しました。滞在中3つ驚いたことがあります。まず一般道路システムが高速道路並みに整備され、空港から家まであつという間に着いたことです。次にお店で売られている飲み物のMサイズが、日本のLLサイズくらい巨大だったことです。これでコーラを飲んでいたら肥満が心配です。最後に、人と人との距離が近いこと

です。知らない人が気さくに話しかけてくれてどこに行っても親切にされました。最終日の姉妹都市提携50周年の祝賀会で剣道を紹介し体験してもらいました。アメリカの剣道人口は世界の中で0.2%なのに剣道家に会えたことは嬉しかったです。剣道は剣術を磨くだけでなく、人格形成

感謝と奉仕の気持ちを大切に、平和な社会を尊重します。だから世界の平和のためにもっと知ってもらいたいと思いました。

緑豊かで静かなデイトンを5月に襲ったトルネードと、最終日の事件に対し哀悼の意を表したいと思います。



夢の2週間

山口 葵

私は、日本の文化を伝えることとどんな時も笑顔で忘れずにコミュニケーションすることを目標にデイトンへ向かいました。ホストファミリーはこの2週間でキャンプ、カヤック、ハイキング、サイクリングなどたくさん自然に触れさせてくれました。その中でも印象的だったのはホストマザーの親戚とのキャンプです。みんな日本について興味があり、たくさん話を聞いてくれました。同世代の友達もでき、星空はとて綺麗で流れ星も見ることができました。

デイトンは自然豊かで素敵な街で、人柄にも感動しました。初めての海外で不安もありましたが、みんな明るく話しかけてくれたので初対面の方でも緊張しなくなりました。会話に困ったときでも笑顔でいれば乗り越えられることが多かったです。家族にはもちろん、友人やペットにもたくさん愛情を注いでいました。姉妹都市提携50周年記念の式典で、私は書道を体験させてあげました。みんな初体験でしたが、「日本」や自分の名前を上手にかけていました。

毎日が楽しくてあつという間に過ぎた夢のような2週間でした。このような貴重な体験ができてとても嬉しく思います。ありがとうございました。

